九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

唐・玄宗の「紀泰山銘」について（訓訳稿）

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/3630

出版情報：文學研究. 104, pp.1-33, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

唐・玄宗の「紀泰山銘」について（訓訳稿）

竹村則行

一　はじめに

中国山東の名山泰山（一五四五㍍）の山頂近くの岩場に、ほとんど垂直に切り立った屏風岩の全面に彫り込まれた唐・玄宗の「紀泰山銘」がある（付録写真参照）。高さ十三、三㍍、幅五、二㍍（後掲の成田山書道美術館資料に拠る）に及ぶ碑刻は、碑文本文のみで二四行、行五一字の枠を取り、合計九九六字に及ぶ雄渾かつ典麗な唐代隷書から成っており、玄宗の親筆と伝えられる。その内容は、唐開元十三年（七二五）、この泰山で封禅の儀式を挙行した経緯と意義について、玄宗李隆基が「群岳」に向かって高らかに宣告したものであり、自ら栄えある中国唐朝の歴史を受け継ぎ、天の子として天下を治める皇帝の誇りと責任が率直に吐露されている。この「紀泰山銘」は唐代隷書の貴重な現物資料であると同時に、開元の聖世を導いた玄宗の治政方針を直に知り、また、当時実行された封禅の実態を知る第一級の資料でもある。筆者は、二〇〇六年九月に初めてこの「紀泰山銘」を実見することができた。予備調査において、中国五岳の東岳、第一の名山として早に名を知られ、唐以後、今日に至るまで無数の登山者の視線を受けたであろうこの碑刻について、中国や日本において既に多くの訳注等が蓄積されているものと思っていたが、

いざ調べてみると、本文の翻刻や石刻資料紹介はともかく、内容にまで踏み込んだ紹介は意外に少ないことが分かった。管見の限りでは、中国の沈維進氏の最近の注釈（二〇〇五年、後掲参考資料参照）を除き、特に日本では、書道法帖としての紹介はともかく、中田勇次郎先生の読み下し文（後掲参考資料）を除いて、ほとんど訳注等が試みられていないようである。そこでこの機会に、非力を顧みず、拙い研究資料を後世に提示するつもりで、「紀泰山銘」全文の翻刻と訓訳を試みることにした。既に有用な先行資料が存在する場合は、筆者の調査不足と不明を恥じ、先達の叱正を仰ぐことにしたい。（出典等の注の多くは沈維進氏の労作を参照したが、新たに筆者が加えたものもある。また、概ね二句を一連として付した一二〇番までの通し番号や句読点等の標号、及びカッコ、行アケ等は、構造の把握と検索の便のために筆者が付したものである。異体字等、今日の常用字を用いたものもある。）

二　唐玄宗「紀泰山銘」（訓訳稿）

紀泰山銘　　泰山に紀するの銘　御製御書

泰山に紀する銘　御製御書

〇本訳稿は泰山現地の碑刻（及びその拓本）を底本とした。他に参照したテキスト『旧唐書』巻二十三、『冊府元亀』巻三十六、『唐文粋』巻十九下、『全唐文』巻四十一については、以下書名のみを表記する。〇銘題および序について、『旧唐書』には「玄宗製紀太山銘、御書勒于山頂石壁之上。其辭曰、（玄宗、「太山に紀するの銘」を製し、御書して山頂の石壁の上に勒す。其の辞に曰く、）（玄宗は「太山に紀する銘」を製し、自ら書して山頂の石壁に刻した。その辞にいう、）」とあり、『冊府元亀』は「帝製紀泰山銘親勒於山頂之右壁。其詞曰」（帝「泰山に紀する銘」を製し、親ら山頂の右壁（ママ）に勒す。其の詞に曰く）、また『唐文粋』は「紀泰山銘　玄宗御製」、『全唐文』は「紀泰山銘并序」

とする。更に『金石萃編』は「紀太山銘」と題し、以下の割注がある。「摩崖。高二丈六尺、廣一丈五尺、二十四行、行五十一字。額題『紀太山銘』四字並隷書、惟『御製御書』四字及末行年月並正書。在泰山東嶽廟後、石崖南向」（摩崖。高さ二丈六尺、広さ一丈五尺、二十四行、行五十一字。額題の『紀太山銘』四字は並びに隷書にして、惟だ『御製御書』の四字及び末行の年月は並びに正書なり。泰山の東嶽廟の後、石崖の南向きに在り）。但し、高広の尺度は現実に符合しない。○泰山の山名表記は「泰山」「太山」「岱山」いずれも通用する。○「御製御書」の四文字は、当然ながら玄宗以外の別人の書であり、本文の隷書とは字体が異なる。

1　朕宅帝位、十有四載、　朕　帝位に宅（お）ること、十有四載、

（朕は皇帝に即位して以来、十有四年、）

○「宅帝位」…『冊府元亀』は「宅位」に作る。

2　顧惟不徳、懵于至道、　顧（おも）うに惟（た）だ不徳にして、至道に懵（くら）きも、

（もっぱら不徳であり、至高の道徳にくらかったが、）

○「不徳」…『尚書』伊訓に「爾惟不徳罔大」と。

3　任夫難任、安夫難安。　夫れ任じ難きを任じ、夫れ安んじ難きを安んず。

（それでも困難な大任に任じ、不安定な難局を乗り切った。）

4　茲朕未知獲戾於上下、　茲（ここ）に朕、未だ戾（つみ）を上下（てんか）に獲（う）るを知らずして

（ここに朕は、天下を混乱させた罪を得たこともわきまえず、天下を平定し、）

5　心之浩蕩、若涉於大川。　心は之れ浩蕩として、大川を渉るが若し。

（開元朝を開いたが、そのことで心は広々となり、大河を渉るかのようであった。）

○「茲朕未知獲戻於上下」…『尚書』湯誥に「茲朕未知獲戻于上下、慄慄危懼、若將隕于深淵」と。

○「於」…『旧唐書』は「於」字を欠く。『冊府元亀』は「于」に作る。第三～五句の叙述は、青年李隆基（玄宗）が韋后や太平公主を誅殺してその勢力を鎮圧し、開元朝を開いたことをいう。

6 賴□□□□□□□□上帝垂休、□□□□□□□先后儲慶、

賴（さいわい）に□□□□□□□□上帝は休（ふく）を垂れたまい、□□□□□□先后（前帝）は慶を儲（つ）み、

（幸いにも上帝は朕に大幸をもたらし、歴代の皇帝は慶福を積み重ねられ、）

○□は空格記号。この碑文の体裁として、上古上帝等に言及する場合は、その直前に四字、直近の先帝等に言及する場合は直前六字、その中間の場合は直前五字、父帝たる睿宗は八字、唐朝の開祖たる高祖の場合は改行して空格をとり、先帝に対する畏敬の念を表明している。以下同じ。○「上帝」…ここは八字の空格を取る（『金石萃編』の空格は四字）ことから、最高敬意を示すと思われるが、後出第四一聯の「上帝」は四字の空格である。同じ用語で空格が一定しないが、ここは「天帝、天神」の意に解する。

7 宰衡庶尹、交修皇極、

宰相庶尹は、交（こも）も皇極を修め、

（宰相や百官は、互いに協力して政治の根本道を修め、）

○「宰衡」…『旧唐書』は「宰相」に作る。○「皇極」…政治の根本となる道徳。

8 四海會同、五典敷暢、

四海は会同し、五典は敷き暢べられ、

（全国から使者が来朝し、五典の道徳は広く行き渡り、）

○「會同」…『周礼』春官・大宗伯に「時見曰會、殷見曰同」と。また『論語』先進に「宗廟之事、如會同」と。○「五典」…父義、母慈、兄友、弟恭、子孝（左伝）の五教をいう。『尚書』舜典に「敬敷五教在寛」と。易・書・詩・春秋・礼の五経を指すという説もあるが、民人に密接する理念として、ここでは五教説をと

る。『冊府元亀』は「伍典」に作る。

9 歳云嘉熟、人用大和。　歳は云に熟するを嘉し、人は用て大いに和す。

（作物は豊収を喜び、民人は大いに和み安堵する。）

○「熟」…『金石萃編』は「孰」に作る。○「人」…民に同じ。太宗李世民の諱を避けていう。

10 百辟僉謀、唱余封禪、　百辟は僉謀し、封禪を唱余し、

（そこで諸侯はみなよく相談して、封禪の儀を提唱し、）

○「百辟」…諸侯をいう。○「唱余」…『唐文粹』『全唐文』は「倡予」に作る。

11 謂孝莫大於嚴父、　謂へらく「孝は嚴父より大なるは莫く、

（申して謂うことには、「孝は父（母）に対して行う以上に大きいものはなく、）

○「孝莫大于嚴父」…『孝経』聖治に「孝莫大于嚴父、嚴父莫大于配天」と。

12 謂禮莫尊于告天、　謂へらく「礼は天に告ぐるより尊きは莫し、

（礼は上天に対して告げ祈る以上に盛大なものはない、）

○「謂」…「謂」字、『旧唐書』本に無し。○「尊」…『旧唐書』は「盛」に作る。○「于」…『冊府元亀』『全唐文』は「於」に作る。

13 天符既至、人望既積、　天符既に至り、人望既に積まば、

（こうして陛下の天命が既に至り、陛下の人望が十分に篤いからには、）

○「符」…『金石萃編』は「苻」に作る。

14 固請不已、固辭不獲。　固く請ひて已まず、固く辞するも獲ず」と。

（我々は何度も陛下の泰山封禪を懇願致しますし、陛下はそれを固辞されませんよう

に」と。）

○『尚書』虞書に「禹拜稽首固辭」と。

15 肆余與夫二三臣、　肆(ここ)に、余は夫(か)の二三の臣と

（そこで、余は二三の臣下とともに、）

○「肆余」…『唐文粹』は「肆余」二字を二行分かち書きにする。○「余」…『全唐文』は「予」に作る。

16 稽虞典、繹漢制、　虞典を稽(かんが)み、漢制を繹(きわ)め、

（虞舜の典礼をよく調べ、漢の制度を考究したうえで、）

17 張皇六師、震疊九寓。　六師を張皇し、九寓を震疊し、

（軍隊を賑々しく行進させ、九州を震い動かし、）

○「張皇六師」…『尚書』康王之誥に「張皇六師」と。○寓…『金石萃編』は小字に作り、『旧唐書』は「宇」に作る。泰山原刻はこの一字が剥落して読めない。○「震疊」…『旧唐書』は「震讋」に作る。「疊」は震い動かす、「讋」は恐れるの意。

18 旌旗有列、士馬無譁、　旌旗に列有り、士馬に譁無く、

（唐朝の御旗をおし並べ、兵士兵馬は一糸乱れること無く、）

19 肅肅邕邕、翼翼溶溶、　肅肅邕邕、翼翼溶溶として、

（いかめしくも恭しく、規則正しく水が流れるようにして、）

20 以至于岱宗、順也。　以て岱宗に至るは、順なるかな。

○「翼翼」…『詩経』小雅・采薇に「四牡翼翼」と。

（はるか岱宗泰山に順調に到着したのである。）

○「于」…「于」字、『旧唐書』は欠き、『全唐文』は「於」に作る。○「岱」…『金石萃編』は小字の「岱」に作る。

21 爾雅曰：「太山爲東嶽。」『爾雅』に曰く、「太山を東嶽と為す」と、

（『爾雅』に「太山を東岳とする」とあり、）

○「爾雅曰」…『爾雅』釈山に「泰山為東岳」と。○「太山」…『旧唐書』『全唐文』ともに「泰山」に作る。

○「嶽」…『旧唐書』は「岳」に作る。○「曰」…『唐文粹』『全唐文』は「云」に作る。

22 周官曰：兗州之鎮山。」『周官』に曰く、「兗州の鎮山なり」と。

（また『周礼』には「泰山は兗州の鎮山である」とある。）

○「周官曰」…『周礼』夏官・司馬に「河東曰兗州、其山鎮曰岱山」と。

23 實惟天帝之孫、羣靈之府、　実に惟れ　天帝の孫、群霊の府にして

（実にこの泰山こそは、天帝天神の血筋を引いた多くの神霊が集まるところであり、）

○「惟」…『旧唐書』は「惟」字を欠く。

24 其方處萬物之始、故稱岱焉、　其の方は万物の始めに處（お）るが故に岱と称し、

（その東方の方位は万物運行の始まりを示すので、「岱」と称し、）

○「惟天帝之孫、羣靈之府、其方處」の十二字、『旧唐書』本に脱す。○清・郝懿行『爾雅郭注義疏』中七に「東方為岱者、言万物更相代於東方也」と。

25 其位居五嶽之伯、故稱宗焉。　其の位は五嶽の伯に居るが故に宗と称す。

（その位階は東岳泰山・南岳霍山・北岳恒山・西岳華山・中岳嵩山の五岳の長子格であるので、宗と称する。）

○「其位居」…『唐文粋』は「其居稱」に作る。○「嶽」…『旧唐書』『唐文粋』は「岳」に作る。

26 自昔王者受命易姓、　昔より、王者は命を受けて姓を易ふ、

（古より、地上の王者は天命を受けて易姓革命を行ってきたし、）

○「王者受命」…『尚書』召誥に「惟王受命」と。

27 於是乎、啓天地、薦成功、　是に於いてか、天地に啓し、成功を薦し、

（そこで、この泰山において、革命に成功したことを天地の神に告げ、）

28 序圖録、紀氏号。　図録を序べ、氏号を紀す。

（新帝の氏族を紀した図録を申し立てて来た。）

○「録」…『唐文粋』は「籙」に作る。○「号」…『旧唐書』『唐文粋』『全唐文』『冊府元亀』いずれも「號」に作る。

29 朕統承先王、茲率厥典、　朕、先王を統承し、茲ち厥の典に率ふは、

（朕は先王の伝統を継承し、先王の封禅の儀典に則ったが、）

○「統承先王」…『尚書』微子之命に「統承先王、修其礼物」と。○「茲率厥典」…『尚書』仲虺之命に「茲率厥典、奉若天命」と。

30 實欲報玄天之眷命、　実に玄天の眷命に報い、

（このことは、実に天神のご加護に報い、）

○「玄」…『唐文粋』は「玄」（最後の一画を欠く）、『金石萃編』は「廟諱」、『全唐文』は「元」に作る。「玄」

は清康熙帝の諱である。

31 爲蒼生之祈福、　蒼生の為に、之れ福を祈らんことを欲するものにして、

（万民の幸福を祈ろうとするものであって、）

○「之」…『旧唐書』は「而」に作る。

32 豈敢高視千古、　豈に千古に高視し、

（どうして自分を悠久の歴史上に高く置き、）

33 自比九皇哉！　自らを九皇に比べんや！

（伝説上の九人の人皇に比べたりなどしようか！）

○「比九皇」…『史記』孝武紀に「高世比德于九皇」と。

34 故設壇場於山下、　故に壇場を山下に設け、

（そこで、祭壇を泰山の麓に設け、）

○「故設壇場於山下」…『冊府元亀』は、以下「故設壇場、答休命」と続き、拙稿の第三十四句「於山下」～第七十八句「余小子敢對揚上帝之」に至る長文の部分を脱する。

35 受羣方之助祭、　羣方の助祭を受け、

（四方八方に助壇を配置し、）

36 躬封燎於山上、　躬（みずか）ら燎を山上に封じ、

（朕自ら泰山の山頂で御神火を焚き、）

37 冀一獻之通神。　一献の神に通ずるを冀（こいねが）ふ。

（この奉献が天神に通じることを祈った。）

38 斯亦因高崇天、　斯れ亦た高きに因りて天を崇（たっと）び、

（このこともまた、泰山の高さにあやかって上天を崇拝し、）

39 就廣增地之義也。』　広きに就いて地を増すの義なり。

（広大な大地について、その価値を増大するということを意味する。）

40 乃仲冬庚寅、有事東嶽、　乃ち仲冬庚寅、東嶽に事（まつ）る有り、

（そこで、仲冬庚寅（開元十三年〔七二五〕陰暦十一月十日）に、東岳で封禅の儀を行い、）

○「嶽」…『旧唐書』『唐文粋』『全唐文』は「岳」に作る。

41 類于□□□□上帝、配□□□□□□□我高祖、　□□□□上帝を類（まつ）り、□□□□□□我が高祖を配すれば、

（上帝を四方に祭り、そこに我が高祖帝《李淵》を配すれば、）

○「類于上帝」…『尚書』舜典に「肆類于上帝」と。『唐文粋』は「類于昊天（二字應乙）天帝」とする。割注は倒字「天昊」の指示であろう。「于」、『全唐文』は「於」に作る。○「配我高祖、在天之神」…『唐文粋』は「配我（高祖在天）之神」とする。○「配」…あわせまつる。配享。

42 在天之神、罔不畢降。　天に在るの神は、畢（ことごと）く降らざるは罔（な）し。

（天上の神は、ことごとく降神しないものはない。）

○「罔」…『金石萃編』は「网」に作る。

43 粤翌日、禪於社首、　粤（ここ）に、翌日、社首に禅し、

（こうして、翌十一月十一日、社首の地で地神を祭り、）

○禪…地をはらって天地神を祭る。○社首…泰山の麓の地名。

44 侑□□□□□□□我聖考、祀於□□□□皇祇、　□□□□□□我が聖考を佑して、□□□□皇祇を祀れば、

（我が先帝《睿宗李旦》の加護を祈って、地神を祭れば、）

○「我聖考」…『金石萃編』は空格無し（他のテキストは空格の配慮をしない）。○「侑」…『旧唐書』は「佑」に作る。

45 在地之神、罔不咸舉。　地に在るの神は、咸な挙らざるは罔し。

（地上の神は、みな祭り尊ばないものはない。）

○「之」…『金石萃編』は小字の「之」に作る。○「罔不咸舉」…『詩経』大雅・雲漢に「靡神不舉」と。

○「罔」…『金石萃編』は「网」に作る。

46 暨壬辰、覲羣后、　壬辰に暨び、羣后を覲るに、

（十一月十二日壬辰になると、朕は諸侯に謁見したが、）

47 上公進曰、天子膺天符、納介福。　上公は進みて曰く、「天子は天符を膺け、介福を納るべし」と。

（上公は進上して、「天子は天命を受け、大福を得られた」という。）

○「膺天符」…『尚書』武成に「誕膺天命」と。

48 羣臣拜稽首、千萬歲、　羣臣は拜して稽首し、千万歳をさけび、

（群臣は拜礼して、千歳万歳を呼号し、）

○「千萬歲」…『旧唐書』は「呼萬歲」、『唐文粋』は「千――萬歲」に作る。○「拜稽首」…『尚書』舜典に「禹拜稽首」と。

49 慶答歡同、陳誠以德。　慶答えて歓同じくし、陳誠するに徳を以てせんとす。

（共に歓楽し、戒め述べて、全て天子の徳によることを奏上する。）

○「答」…『旧唐書』は「合」、『唐文粋』『金石萃編』は「荅」に作る。答・荅は同じ。○「陳」…『旧唐書』は「乃陳」とする。『金石萃編』は「陳□誡」に作る。○「陳誡于徳」…『尚書』咸有一徳に「伊尹～将告帰、乃陳誡于徳」と。

50 大渾叶度、彝倫攸敍、　大渾は度に叶ひ、彝倫は攸に敍するは、

（こうして、渾天の運行が協和し、天下の倫理がゆったり調和しているのは、）

○「叶」…『旧唐書』は「協」に作る。

51 三事百揆、時乃之功。　三事・百揆、時乃の功なり。

（大夫や長官よ、そなたたちの功績である。）

○「三事」…三事大夫。○「百揆」…国政長官。『尚書』舜典に「納于百揆、百揆是敍」と。

52 萬物由庚、兆人允植、　万物は由庚し、兆人は允植するは、

（万物があるべき所にあり、万民が喜んで植栽に従事するのは、）

○「萬物由庚」…「由庚」は『詩経』小雅の篇名、『詩経』序に「由庚、萬物得由其道也」と。本文は佚。

○「兆人」…兆民＝万民。太宗李世民の避諱。『禮記』内則に「降徳于衆兆民」と。

53 列牧衆宰、時乃之功。　列牧・衆宰、時乃の功なり。

（多くの州官や県官よ、そなたたちの功績である。）

○「衆」…『唐文粋』は「眾」に作る。

54 一二兄弟、篤行孝友、　一二の兄弟は、篤く孝友を行ひ、

（我が一二の兄弟は、父母への忠孝、兄弟への友愛を実行し、）

○「一二」…『尚書』康王之誥に「一二臣衛」と。○「篤行」…『礼記』中庸に「明辨之、篤行之」と。○「篤」…『金石萃編』は蔦に作る。

55 錫類萬國、時唯休哉！　類を万国に錫(あた)ふるは、時(これ)唯だ休(よ)き哉！

（万国に善行を示し与えたのは、まことにすばらしい。）

○「錫類」…『詩経』大雅・既醉に「永錫爾類」と。○「唯」…『全唐文』『金石萃編』は「惟」に作る。

56 我儒制禮、我史作樂、　我が儒は礼を制し、我が史は楽を作り、

（我が朝の儒者は封禅の儀礼を制定し、史官は封禅の楽章を作り、）

57 天地擾順、時惟休哉！　天地擾順なるは、時(これ)惟だ休(よ)き哉！

（天地万物が順和になったのは、まことにすばらしい。）

○「惟」…『旧唐書』は「唯」、『唐文粋』は「維」に作る。

58 蠻夷戎狄、重譯來貢、　蠻夷戎狄、訳を重ねて来り貢するは、

（東西南北の異民族が、通訳を重ねて我が朝に来貢するのは、）

○「蠻夷戎狄」…『禮記』王制に「東方曰夷～、南方曰蠻～、西方曰戎～、北方曰狄～」と。

59 □□□□□累聖之化、朕何慕焉。　□□□□□累聖の化にして、朕何ぞ焉を慕はんや。

（歴代帝王の重なる徳化の賜物であって、朕は何にもまして敬慕する。）

60 五靈百寶、日來月集、　五霊・百宝、日に来たり月に集まり、

（また聖世を象徴する鳥獣や金銀財宝が、毎日毎月集まり蓄えられ、）

○「五霊」…麒麟・鳳凰・亀・龍・白虎の神霊鳥獣。

61 會昌之運、朕何感焉。　会昌の運たるは、朕何ぞ焉を感ぜんや。

（盛世の気運が漲っていることに、朕は何とも感動する。）

○「感」…『旧唐書』は「惑」に作る。

62 凡今而後、儆乃在位、　凡そ今より後は、儆みて位に在り、

（朕は、これより以後は、いっそう慎んで皇帝の位に在り、）

63 一王度、齊象灋、　王度を一にし、象法を斉へ、

（王法を統一し、政治の法式を整え、）

○「灋」…『旧唐書』『唐文粋』『全唐文』『冊府元亀』は「法」に作る。「灋」は古字。

64 搉舊章、補缺政、　旧章を搉り、缺政を補ひ、

（旧法を調べて改め、政治の欠陥を補充し、）

○「搉」…『旧唐書』は「權」、『唐文粋』は「搉」、『全唐文』『金石萃編』は「搉」に作る。共に意は同じ。

65 存易簡、去煩苛、　易簡を存し、煩苛を去き、

（平易簡潔な法律を保存して、煩瑣なものを除去することに努め、）

○「易簡」…『易』繫辭伝上に「易則易知、簡則易從」と。『唐文粋』は「簡易」に作る。

66 思立人極、乃見天則。』　思に人極を立て、乃ち天則を見さん。』

（ここに、人として至高の基準を立て、天の法則を顕現させようと思うのである。）

○「人極」…『太極図説』に「聖人定之以中正仁義、〜立人極焉」と。また『易経』乾辞に「乾元用九、乃見天則」と。

67 於戲！天生蒸人、惟后時乂、　於戲、天は蒸人を生み、惟だ后のみ　時　乂め、

（ああ、上天が万民を育むなか、地上の聡明な皇帝はよく治め、）

○「天生蒸人」…『詩経』大雅、蒸民に「天生蒸民」と。「民」は太宗李世民の諱により、「人」に改める。

○「時乂」…『尚書』仲虺之誥に「惟天聡明時乂」と。

68 能以美利利天下、事天明矣。　能く美利を以て天下を利し、天に事ふること明らかなり。

（よく天下に大利をもたらし、天帝に事えて道理を明らかにしてきた。）

○「能以美利利天下」…『易経』乾卦・文言に「乾始能以美利利天下」と。

69 地徳載物、惟后時相、　地は載物を徳み、惟だ后のみ　時　相け、

（また、大地が万物に恵みを与えるなか、聡明な皇帝はこれを相助け、）

70 能以厚生生萬人、事地察矣。　能く厚生を以て万人を生み、地に事へて察なり。

（よく万民の生計や衣食を充足させ、地の神に事えてその道理を明らかにしてきた。）

○「事天明」「事地察」…『孝経』応感章に「子曰、昔者明王、事父孝、故事天明、事母孝、故事地察。」と。

71 天地明察、鬼神著矣。　天地明察なれば、鬼神著れん。

（天の上下共にこのように明察であれば、天神も降臨して大福をもたらすであろう。）

72 惟□□□□□我藝祖文考、精爽在天、　惟れ我が□□□□□芸祖・文考は、精爽天に在り、

（さて、我が芸祖たる高祖（李淵）や文考たる睿宗（李旦）は、その霊魂は天上にあらせられるが、）

○「藝祖」…文徳才芸ある先祖の美称。『尚書』舜典に「格子藝祖」と。○精爽＝霊魂、みたま。

73 其曰「懿余幼孫、克享□□□□上帝、　其れ曰く「懿余が幼孫、克く□□□□上帝を享けよ、

（その仰せに曰く、「おお、我が幼孫（＝玄宗李隆基）よ、しっかりと天帝を祭るのだ、）

○「余」…『旧唐書』は「爾」、『唐文粹』『全唐文』は「予」に作る。

74 惟□□□□帝時若、馨香其下」。　惟（そ）れ□□□□帝は時若（これしたが）ひ、其の下に馨香す」と。

（天帝は従順であるので、祭壇に篤くお祭りをすれば、必ず福をもたらすであろう。）」と。）

○「時若」…『詩経』大雅、蒸民に「天子是若」と。是と時は同義、若は順の意。○「惟帝時若」…『唐文粹』は二行分かち書きにする。○「馨香」…『尚書』酒誥に「弗惟徳馨香」と。

75 丕乃曰、「有唐氏文武之曾孫隆基、　丕乃（すなは）ち曰く、「有唐氏文武の曽孫たる隆基、

（そこで、私が答えて申すには、「有唐李氏の文王武王の曽孫たる李隆基は、）

○「丕乃」…そこで。『尚書』盤庚上に「丕乃敢大言、汝有積徳」と。

76 誕錫新命、纘戎舊業、　誕（ここ）に新命を錫（たま）はり、戎（なんじ）が旧業を継がん、

（ここに新たに天命を授け、前代帝王の偉業を継承し、）

○「戎」…汝に同じ。『旧唐書』『唐文粹』は「我」に作る。

77 永保天禄、子孫其承之」。　永く天禄を保ち、子孫其れ之を承けん。」と。

（永く福禄を保持し、その子孫も長く之を継承致したい」と。）

78 余小子、敢對揚□□□□上帝之休命、　余小子、敢て□□□□上帝の休命を対揚し、

（私小子（玄宗）は敢えて上帝の美しき天命に答え奉るために、）

○「余小子」…余小子は古代帝王の謙称。『尚書』太甲に「余小子不明与徳」と。『唐文粋』『全唐文』は「予小子」に作る。○「上帝之休命」…『尚書』説命に「敢対揚天子之休命」と。

79 則亦與百執事、尚綏兆人、　則ち亦た百の執事と兆人を尚綏し、

（多数の役人たちと、万民を安んじ、）

○「兆人」…前五十二句の注に同じ。

80 將多于前功、而毖彼後患。　将に前功より多く、而して彼の後患を毖（つつし）まん。

（前王の功績を更に抜きんで、後の患いを慎みたい。）

○『詩経』周頌・小毖に「予其懲、而毖後患」と。○「于」…『全唐文』は「於」に作る。

81 一夫不獲、萬方其罪予。　一夫獲ざれば、万方其れ予を罪せん。

（万民が一人でも適所を得なければ、天下は私を罪するであろう。）

○「一夫不獲」…『尚書』説命に「一夫不獲、則曰、時予之辜。」と。○「萬方其罪予」…『尚書』湯誥に「其爾萬方有罪、在予一人、予一人有罪、無以爾萬方」と。○「予」…『冊府元亀』は「余」に作る。

82 弋心有終、上天其知我。　弋心にて終わる有るは、上天其れ我を知らん。

（私がこのように一心を貫くのは、上天も私の真心を解って下さるであろう。）

○「弋心」…『旧唐書』『冊府元亀』は「一心」、『唐文粋』『全唐文』『金石萃編』は「一人」に作る。

83 朕惟寶行三徳、曰慈、儉、謙。　朕は惟だ三徳を宝行するのみ、曰く慈、倹、謙と。

（朕はただ三つの徳を重点実行するのみ、曰く、慈、倹、謙と。）

○「惟」…『金石萃編』は「維」に作る。

84 慈者、覆無疆之言、　慈なる者は、無疆の言を覆し、

（茲とは、慈愛深く、無限の玉言を反復して心に刻み、）

85 儉者、崇將來之訓、　倹なる者は、将来の訓を崇び、

（倹とは、謙虚につづましく、将来の訓戒を尊び守る意である。）

○「倹」…『冊府元亀』は「險」に誤る。

86 自滿者人損、自謙者天益。　自ら満つる者は人損ひ、自ら謙なる者は天益す。

（自ら満足すれば他人に批判され、自ら謙虚であれば天が味方する。）

○「自満者人損、自謙者天益」…『尚書』大禹謨に「満招損、謙受益」とあり、その孔氏伝に「自満者人損之、自謙者人益之」と。

87 苟如是、則軌迹易循、基構易守。　苟も是の如くあれば、則ち軌迹も循ひ易く、基構も守り易からん。

（もしこのようであれば、先人の軌跡も従いやすく、国家の組織も保持しやすいであろう。）

○「苟如是」…『冊府元亀』は「如是」に作る。○「基構」…『冊府元亀』は「基搆」に作る。

88 磨石璧、刻金記、　石璧を磨し、金記を刻すれば、

（そこで、泰山山頂の玉石の巖を磨き、そこに金字を銘記することにすれば、）

○「刻金記」…『旧唐書』は「刻金石」、『冊府元亀』は「刻金字」とする。

89 後之人、聽詞而見心、　後の人の、詞を聴きて心を見、

（後世の人が、朕の言辞を聴いて朕の真心を見、）

○「後之人、聽詞」…『旧唐書』は「冀後人之聽辭」、『冊府元亀』は「冀後之人聽詞」とする。

90 觀末而知本。」 末を観て本を知らん。

（表現された文字の底意を汲んで、朕の本心を知ることができるであろう。）

91 銘曰、維天生人、立君以理、 銘に曰く、維(こ)れ天は人を生じ、君を立て以て理(おさ)め、

（銘文に云う、それ天は万民を生育するが、君王を立てて代わりに天下を治めさせ、）

○「維天生人」…『尚書』仲虺之誥に「惟天生民有欲」と。○「維」…『唐文粋』『全唐文』は「惟」に作る。

92 維君受命、奉天爲子。 維れ君は命を受け、天を奉じて子と為る。

（君王は天命を受け、天を奉って天子となるものである。）

○「維」…『唐文粋』『全唐文』は「惟」に作る。

93 代去不留、人來無已、 代去りて留まらず、人来りて已む無く、

（天子は代々移り行き、留まることがないなか、）

94 德涼者滅、道高斯起。」 徳の涼(うす)き者は滅び、道の高きは斯れ起く。

（徳の薄い天子は滅び、高徳の天子の御代は栄えるであろう。）

○「德涼」…『左伝』荘公三十二年に「虢多涼德」と。

95 赫赫□□□

○「高祖」…唐朝の開祖李淵。碑刻原文では、字前の前行十七字の空格を置いて、「高祖」に改行する（付録写真参照）。第四一句の「我高祖」が六字の空格であり、以下の「高宗」（六字空格）「睿宗」（八字空格）に比しても、空格が異常に長いのは、「高祖」への最高畏敬を示す以外の理由は考えられない。空格の部分に凹みやひび割れ等は認められない。『金石萃編』の空格は八字で改行する。

96 爰革隋政、奄有萬邦。　爰（ここ）に隋政を革（あらた）め、奄（おお）ひて万邦有り。

（隋朝を革命し、その威令は全国を覆った。）

○「隋」…『金石萃編』は「隨」に誤る。○「奄有萬邦」…『詩経』周頌・執競に「奄有四方」と。

97 罄天張宇、盡地開封、　天を罄（つ）くして宇を張り、地を尽くして封を開く。

（そして天の果てまで国境を伸張し、地の極みまで領土を拡張された。）

98 武稱有截、文表時邕。」　武は有截に称され、文は時邕に表（あら）はる。

（その武功は海外にまで称せられ、その文治は太平を表明している。）

○「有截」…『詩経』商頌、長発に「海外有截」と。

99 □□□□□□高宗稽古、德施周溥、　□□□□□□高宗は古に稽（かんが）み、徳を施すこと周溥（あまね）く、

（高宗〔李治〕はよく古学を修められ、その道徳の恩沢は遍く施され、）

○「高宗」…『冊府元亀』は「高祖」に誤る。○「徳施」…『易』乾に「見龍在田、徳施普也」と。

100 茫茫九夷、削平一鼓。　茫茫たる九夷を、削平すること一鼓なり。

（無限に広大な九州中国を、短時日のうちに平定し統治された。）

101 禮備封禪、功齊舜禹、　礼は封禅に備はり、功は舜禹に斉（ひと）し。

102 （その儀礼は泰山の封禅に備わり、その功績は古の舜や禹にも等しいものであった。）

○「禮備封禪」…乾封元年（六六六）、高宗が泰山で封禪を挙行したことをいう。

巖巖岱宗、衎我神主。」巖巖たる岱宗、我が神主を衎（たのし）ましむ。

（以来、高峻な岱宗泰山に護られ、我が唐朝の神位は喜び楽しんでいる。）

○「巖巖」…『詩経』魯頌・閟宮に「泰山巖巖」と。『旧唐書』は「巖巍」に作る。○「衎」…楽しむ。『詩経』商頌・那に「衎我烈祖」と。『旧唐書』は「衛」に作る。

103 □□□□□□□中宗紹運、舊邦維新、　□□□□□□□中宗は運を紹（つ）ぎ、旧邦維（こ）れ新たなり、

（中宗〔李顯〕は皇位を継承し、武則天の周を一新したし、）

○「舊邦維新」…「舊邦」は則天武后の周を指す。『詩経』大雅・文王に「周雖舊邦、其命維新」と。○「維新」…『全唐文』『金石萃編』は「惟新」に作る。

104 □□□□□□□□□睿宗繼明、天下歸仁。　□□□□□□□□□睿宗は明を継ぎ、天下は仁に帰す。

（先帝の睿宗〔李旦〕は中宗の後を承け、天下はその仁徳に帰服した。）

○「天下帰仁」…『論語』顔淵に「一日克己復礼、天下帰仁焉」と。○「睿宗繼明、天下歸仁」…この二句八字は『冊府元亀』に欠く。

105 恭己南面、氤氲化淳、　己を恭（つつし）んで南面すれば、氤氲として化淳するも、

（中宗、睿宗は自己を戒めて万民に接し、万物が成長発展する風気が醸成されたが、）

○「恭己南面」…『論語』衛霊公に「恭己、正南面而已矣」と。○「氤氲」…『易経』繫辞伝下に「天地絪縕、万物化醇」と。『唐文粹』『全唐文』は「絪縕」につくる。○「化淳」…『全唐文』は「化醇」に作る。

106 告成之禮、留諸後人。」 告成の礼は、諸(これ)を後人に留む。

（国家中興の達成に係る封禅の儀礼は、これを後の皇帝に託された。）

○「告成」…『詩経』大雅・江漢に「經營四方、告成于王」と。

107 緬余小子、重基□□□□□□五聖、 緬(おも)へば余小子、重ねて□□□□□□五聖に基づき、

（遙かに思えば、小子たる朕は、これらの五皇帝の礎を承けて即位したが、）

○「余」…『唐文粹』『全唐文』は「予」に作り、『冊府元龜』は「餘」に誤る。○「五聖」…高祖李淵、太宗李世民、高宗李治、中宗李顯、睿宗李旦の五帝を指す。

108 匪功伐高、匪德矜盛。 功の高きを伐(ほこ)るに匪(あら)ず、徳の盛んなるを矜(ほこ)るに匪(あら)ず。

（それらの先帝に比べれば、朕は高い功績も、誇るべき道徳も無かった。）

109 欽若祀典、丕承永命、 祀典に欽若(つつし)み、永命を丕承すれば、

（ただ先祖の儀典に謹み順い、永遠の天命を奉じたところ、）

○「欽若」…敬い順う。『尚書』堯典に「欽若昊天」と。○「永命」…『尚書』召誥に「祈天永命」と。

110 至誠動天、福我万姓。」 至誠は天を動かし、我が万姓を福(たす)く。

（朕の至誠が上天を動かし、我が唐朝の万民を加護して下さったのである。）

○「万」…『旧唐書』『唐文粹』『全唐文』『冊府元龜』は「萬」に作る。

111 古封太山、七十二君、 古(いにしえ)より太山を封ずるは、七十二君、

（古来、泰山で封禅を挙行した君王は七十二名おり、）

○「太山」…『唐文粋』『全唐文』『冊府元亀』は「泰山」に作る。○「七十二」…『史記』巻二八、封禅書に「古者封泰山禅梁父者七十二家」と。

112 或禪弈弈、或禪云云。　或いは弈弈に禅し、或いは云云に禅す。

（それらは、泰山山麓の亭亭や云云で封禅の儀式を行った。）

○「弈弈」「云云」…いずれも泰山山麓の地名。『旧唐書』『冊府元亀』は「亭亭」「云云」に作る。

113 其迹不見、其名可聞、　其の迹は見えざるも、其の名は聞くべく、

（その遺跡は不明だが、その地名は今日にまで伝わっている。）

114 祇適□□□□□□文祖、光昭舊勳。」　□□□□□□文祖に祇適（つつしみしたが）ひて、旧勲を光昭（かがやか）せんとす。

（朕はこれら文徳のある祖先に謹み順い、前代帝王の偉業を更に輝かせたく思う。）

○「祇適」…つつしみ、したがう。『尚書』康誥に「今民將在祇遹乃文考」と。

115 方士虚誕、儒書齷齪、　方士は虚誕にして、儒書は齷齪（あくせく）、

（従来、道教の方士の言は偽りが多く、儒家の書はこせついて狭く、）

○「齷齪」…『旧唐書』『冊府元亀』は「不足」に作る。○この一節は焚書坑儒を行った秦始皇帝や方士の讖緯説を信じた後漢光武帝の先例を指して言うと思われるが、これから約三十年後、玄宗自ら、馬嵬で死した楊貴妃の霊魂を方士に探させた（白居易「長恨歌」）のは痛烈な歴史の皮肉である。

116 佚后求僊、誣神檢玉。　佚后僊を求め、神を誣し玉を検せしむ。

（以前の放佚な天子は神仙を追求するあまり、神霊を欺き、地下に玉函を埋めたりした。）

○「求僊」…『旧唐書』『唐文粋』『全唐文』『冊府元亀』は「求仙」に作る。○「誣神」…『冊府元亀』は「巫神」に誤る。○「檢玉」…『漢書』漢六，武帝紀に「登封泰山」とあり、その孟康注に「王者功成治定、告成功於天。～刻石紀号、有金策・石函・金泥・玉検之封焉」と。検は函に同じ。『冊府元亀』『金石萃編』は「撿玉」に作る。また『資治通鑑』巻四四、光武帝中元一（AD五六）にも光武帝の同様の記事が見える。

117 秦災風雨、漢汙編錄、　秦は風雨に災され、漢は編録を汙（けが）す。

（その結果、天の怒りを受けた秦始皇帝は泰山封禅時に風雨に祟られ、後漢の光武帝は歴代の封禅の儀典を汚すこととなった。）

○「漢汙編録」…『資治通鑑』巻四四、光武帝建武三十年（AD五四）に、「羣臣上言：『即位三十年、宜封禅泰山。』詔曰：『即位三十年、百姓怨気満腹、～何事汚七十二代之編録！』」と。『後漢書』巻七、祭祀上もほぼ同じ。

118 德未合天、或承之辱。　徳の未だ天に合はざれば、或いは之を辱に承くるなり。

（皇帝の道徳が天帝の要望に合わない時は、皇帝は恥辱によって天罰を受けるのである。）

119 道在觀政、名非從欲、　道は政を観るに在り、名は欲を従（ほしいまま）にするに非ず。

（皇帝の道徳は政治に反映されるものであり、皇帝の名声はほしいままな欲望からは生まれないであろう。）

銘心絶巖、播告羣嶽。」心を絶巖に銘(きざ)み、群岳に播告せんとす。

（朕は、この教訓を泰山山頂の切り立った巖壁に刻み、以て諸岳に布告するのである。）

○「播告」…『尚書』商書、盤庚上に「王播告之」と。○「羣嶽」…『唐文粋』は「羣岳」の後に「従石刻本校正」の二行分かち書きの注を入れる。「石刻本」が何を指すか不明。或いは泰山の原刻を指すか。○「羣嶽」…『旧唐書』『唐文粋』は「羣岳」、『冊府元亀』は「群牧」に作る。

大唐開元十四年歳在景寅、九月乙亥朔十二日景戌建

大唐開元十四年（七二六）、歳は景（丙）寅に在り、九月乙亥朔の十二日、景戌建つ。

（大唐開元十四年（七二六）、丙寅、九月乙亥朔の十二日景戌に建てる。）

○この識語は『旧唐書』『唐文粋』『全唐文』『冊府元亀』ともに無い。字体も本文の雄渾な隷書とは異なる。『唐文粋』は末尾に「従石刻本校正」（石刻本によりて校正す）と注する。

三　備忘のためのメモ

この訓訳稿は、筆者がこの十数年来、継続して担当している市民講座（朝日カルチャーセンター、現在のテーマは「中国黄河の風土と文学」）において、二〇〇六年五～六月の講読用に作成した資料を、九月の泰山現地での確認、更に十月の成田山書道美術館での拓本確認を経て、いくらかの修正を施し、現地写真を付して成ったものである。

全ての学習において、特にそれが外国文化の学習であれば尚一層、現地学習の必要性と有用性が増大するが、今回の講座の「修学旅行」が秋の好天に恵まれ（時に日本は台風の渦中であった）、千三百年を経て今も泰山山頂に鎮座する玄宗の「紀泰山銘」を実見できたことは、生涯に何度もは得難い大きな幸せであった。山東の旧跡を巡る「修学旅行」は、この他に黄河や曲阜、梁山泊の名所、或いは蒲松齢・李清照・諸葛亮・王羲之等の故居、更には山東・青州・城子崖・銀雀山博物館や古墓遺跡等を専用バスで周遊する一七〇〇㎞の強行軍であった。今日、ともすれば北京と上海のメイン観光ルートから逸れた山東が古来中国文明の豊かな源泉であったことが実感できたが、ここでは、あとがきに代え、今次旅行実見の主目的であった玄宗「紀泰山銘」について、その訓訳作業中に気づいた幾つかの瑣事を以下にメモし、後日の論考に備えたい。

（一）「紀泰山銘」成立の経緯、及び関係者等について

『紀泰山銘』成立の経緯、及び関係者等については、『旧唐書』巻二十三、礼儀志の記録をもとに、許道勛『唐明皇与楊貴妃』（人民出版社、一九九〇年）一五九～一六六頁に詳細に述べるが、より簡潔には、清・朱彝尊「開元太山銘跋」（『曝書亭集』巻四十九）中に次のようにある。

開元天子、允文武百寮之請、於十三年冬十一月、式遵故實、有事于太山。詔中書令張説・右散騎常侍徐堅・太常少卿韋縉・祕書少監康子元・國子博士侯行果、於集賢書院撰儀注、己丑、日南至、法駕詣山下、御馬以登、行升中之禮。天子製「紀泰山銘」親札勒于山頂之石。以十四年九月景戌告成。於是中書令張説撰「封祀壇頌」、侍中源乾曜撰「社首壇頌」、禮部尚書蘇頲撰「朝覲壇頌」。

開元天子、文武百寮の請を允（ゆる）し、（開元）十三年冬十一月、故実に式遵し、太山に事（まつ）る有り。中書令張説・右

散騎常侍徐堅・太常少卿韋縚・祕書少監康子元・國子博士侯行果に詔して、集賢書院に於て儀注を撰せしめ、己丑、日の南至するころ、法駕山下に詣り、馬を御して以て登り、升中之禮を行なふ。天子、「紀泰山銘」を製し、親しく山頂の石に札勒す。十四年九月景戌を以て告成す。是に於て中書令張説は「封祀壇頌」を撰し、侍中源乾曜は「社首壇頌」を撰し、禮部尚書蘇頲は「朝覲壇頌」を撰す。

これに拠れば、玄宗が泰山で封禪を挙行したのは開元十三年（七二五）十一月、「紀泰山銘」の石刻が完成したのは翌十四年九月の事であり、封禪の儀式や封禪文に主に関わったのは中書令の張説である。本「紀泰山銘」第十五句に、封禪の儀を調べて定めた臣下として「二三臣」とあるのは、ここに言う張説・徐堅らを含むであろう（因みに徐堅は『初学記』の編者でもある）。中でも張説は封禪立案の中心人物であり、張説「大唐封祀壇頌」（『全唐文』巻二二一所収）や蘇頲「封東嶽朝覲頌」（『全唐文』巻二五〇所収）は、直近の臣下による頌文であり、玄宗の「紀泰山銘」と併せ読めば、玄宗の泰山封禪の経緯と実態がより鮮明になるであろう。

（二）「紀泰山銘」に見る玄宗の開元治政方針

「紀泰山銘」には、二十九歳で開元朝を開いて十数年後の開元十三年、いよいよ揺るぎない唐朝繁栄の基礎を固めた四十一歳の玄宗の自信に満ちた治政方針が、率直に且つ謙虚に述べられている。太祖や高宗、睿宗への尊崇の念の表明はもとよりであるが、第81句「一夫不獲、萬方其罪予。一夫獲ざれば、万方其れ予を罪せん。」や、第83句「朕惟寶行三徳、曰慈、儉、謙。朕は惟だ三徳を宝行するのみ、曰く慈、倹、謙と。」、また第86句「自滿者人損、自謙者天益。自ら満つる者は人損ひ、自ら謙なる者は天益す。」、および第94句「徳涼者滅、道高斯起。徳の涼き

者は滅び、道の高きは斯れ起く。」等の表現は、その起草に当たって張説等の臣下の助言があったことも考えられるが、最終的には玄宗の綸言として決定した、重い意味を持つ治政方針の表明であると筆者は考える。

（三）「紀泰山銘」文の出典の特徴

「紀泰山銘」文の出典引用は際立った特徴を持つ。それは『書経』（『尚書』）からの引用（転用）が極めて多いことである。上記の訓訳稿では、沈維進氏の労作に基づき、筆者の追加分を含め、努めて引用例を表示するようにした。このことは、『書経』が堯舜以来の古代帝王の言行録である以上、或いは当然のことであり、実際に『書経』文言の採用によって「紀泰山銘」に今上皇帝としての重々しさが付加された効果がある。「紀泰山銘」文は、その原稿の段階こそ何人かの臣下の下原稿があったとしても、最終的には玄宗が決定し、親しく揮毫した勅書である。そこに、古代帝王の言行を記録した『尚書』からの引用・転用を多く含むことは、玄宗の開元治政に対する、また泰山封禅による天帝の下命を受けたとする玄宗の天子としての並々ならぬ決意表明を伺うことができるであろう。

（四）「紀泰山銘」の異文、文字の異同について

本訳稿では、泰山山頂の石刻「紀泰山銘」原文を底本とし、『旧唐書』『冊府元亀』『唐文粋』『全唐文』『金石萃編』諸本の「紀泰山銘」文を用いて校合した。これ以外に参照すべき校本の脱落は筆者の不明による。万―萬、維―惟―唯、予―余、太―泰、于―於、嶽―岳等の表記の異同は問題ないとしても、現（原）石刻本と『旧唐書』本との異同は、他の諸本と比べれば成立の時間が近いだけに注目される。現（原）石刻本と『旧唐書』本に決定的な表現の差異は認められないのであるが、天子の詔文における表記の異同は、世が世ならば大変な責任問題に発

展する可能性を含むのではないか。このことについて、筆者の推測は以下のようである。それは、今日の複写万能の時代と違い、一篇ごとに抄写による複本が必要であった当時において、恐らく「紀泰山銘」の正本は遥か東方の泰山にまで運ばれ、現実に彫工による石刻へと作業が進行した。それは今日の泰山山頂の唐摩崖に結果している（付録写真参照）。一方、唐の宮殿に珍蔵されたであろう副本は、その後の政変等による管理の変動や再製等を経て文字の異同が生じ、しかも当時の通信情況からは泰山現地の正本との照合もままならぬまま、今日の状態を招いたとは考えられないか。以上は明確な裏付けもない筆者の勝手な憶測であるが、ここにメモして後日の再考に備えたく思う。

（五）「紀泰山銘」に記された儒者、方士批判、及び天宝末年の兵乱の皮肉

玄宗は泰山封禅が挙行できたことについて、「紀泰山銘」第56句に「我儒制禮、我史作樂、我が儒は礼を制し、我が史は楽を作り」と謝辞を述べるが、銘文の末尾に近い第115句では「方士虚誕、儒書齷齪、方士は虚誕にして、儒書は齷齪（あくせく）」として、道教の方士や儒家の書に対する不信感を露わにする。この部分は、次に続く天帝の信任を失した秦の始皇帝や後漢の光武帝の故事に直結し、最終部の第118句「徳未合天、或承之辱。徳の未だ天に合はざれば、或いは之を辱に承くるなり。」、119句「道在觀政、名非從欲、道は政を観るに在り、名は欲を従（ほしいまま）にするに非ず。」に収斂するが、唐朝における一連の方士偏重や続く天宝期における楊貴妃への偏愛、及びその結果として勃発した馬嵬の乱等を想起すると、「紀泰山銘」では玄宗は過去の例を教訓に述べたはずのものが、皮肉にも、その後の治政において、玄宗自身の教訓として自らの運命を「予見」したもののようにも思える。即ち、開元から天宝期に発生した楊貴妃への偏愛、楊国忠の重用こそは安禄山の乱を惹き起こした直接の原因であり、一時とはいえ、天子の蒙塵を余儀なくし、そのまま楊貴妃殺害に直結した。その意味で、この第118、119句の表現は、皮肉にも玄宗自身の

痛烈な教訓として跳ね返るものである。また、唐朝における道教、方士偏重については、唐朝が老荘思想を重んじ、果ては憲宗・穆宗・宣宗を含む歴代皇帝が道士の調合した不死の仙薬を服して、見事に〝昇天〟したこと、はたまた玄宗楊貴妃の故事を詠んだ陳鴻の「長恨歌伝」に、方士自ら〝方士はしばしば偽物を天子に進呈する（新垣平之詐）〟ことを述懐していること等を挙げれば十分であろう。これらのことを総合して考えれば、「徳未合天」「名非従欲」とは過去一般の教訓ではなく、皮肉にも玄宗自身の戒めであったように筆者には読み取れるのである。

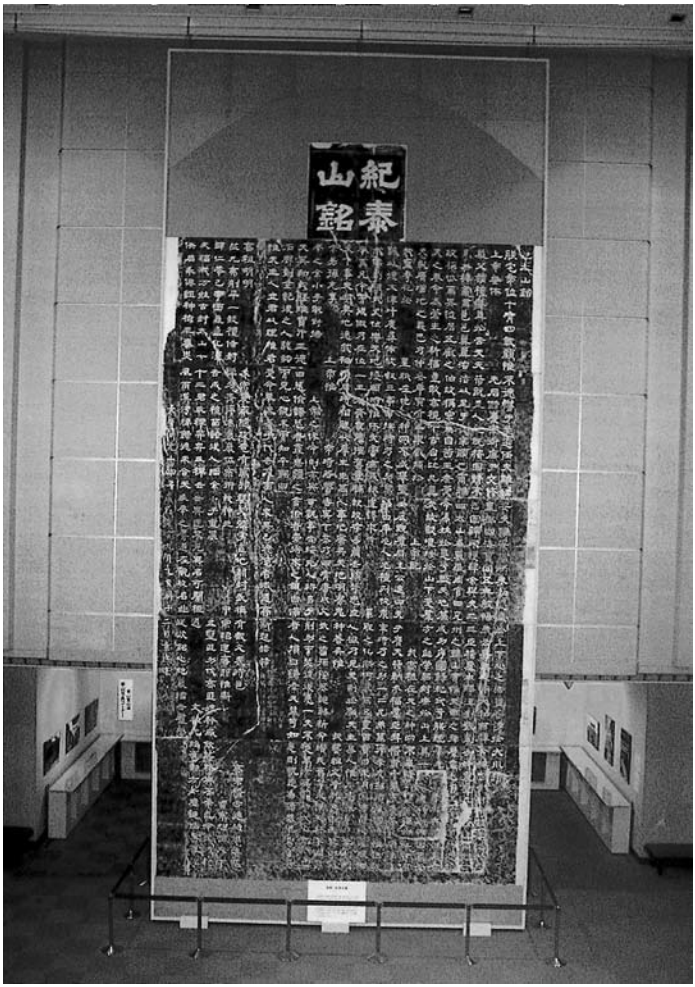
※　参考資料

○五代・劉昫等撰『旧唐書』（中華書局、一九七五年）巻二十三、礼儀志三
○宋・王欽若等撰『冊府元亀』（中華書局、一九五九年、拠明刻本影印）巻三十六、帝王部、封禅二
○宋・姚鉉撰『唐文粋』（浙江人民出版社、一九八六年、拠光緒十六年許氏榆園刻本影印）巻十九下、封禅
○清・董誥等撰『全唐文』（中華書局、一九八三年、拠嘉慶十九年内府刊本影印）巻四十一、元宗皇帝
○清・王昶撰『金石萃編』（陝西人民美術出版社、一九九〇年、拠民国十年石印本影印）巻七十六、唐三十六
○宋・司馬光撰『資治通鑑』（中華書局香港分局、一九五六年一版、一九七六年重印）巻二一二、開元十三年条
○中田勇次郎「唐、玄宗御製御書紀泰山銘」（読み下し文。展覧会冊子『原拓紀泰山銘および泰山景観』所収、成田山書道美術館、一九九二平成四年）
○泰安市文物局編『泰山石刻大全』（斉魯書社、一九九三年）所収「紀泰山銘摩崖刻石」
○沈維進主編『泰山碑刻経典』（鳳凰出版伝媒集団・江蘇美術出版社、二〇〇五年）所収「唐・隷書紀泰山銘」
（『泰山石刻大観』線装書局、二〇〇二年は未見）

○参考までに、「紀泰山銘」の原拓本が北京琉璃廠・海王邨の古書店上棚に大包の商品として並んでいる。筆者は二〇〇六年十一月、北京旅行中に偶然発見した。瞥見のために正確は期し難しいが、この大包は「紀泰山銘」全文約一千字を、二字ずつ約五百枚の拓本に写し取り、厚紙等で裏打ちして一大包としたものである。拓本製作をめぐる経緯等は不明。売価は（筆者の誤認でなければ）八十八万元。

※ 付録写真

泰山原刻「紀泰山銘」（2006年 9 月撮影）



原拓「紀泰山銘」（成田山書道美術館蔵）

「紀泰山銘」：原刻（上）と原拓（下）の部分写真